

基礎看護実習 I における実習内容の検討： 実習レポートの分析から

加藤法子*, 佐藤友美*, 高橋清美*, 永嶋由理子*, 中野榮子*

Examination of the Practicum Contents in *Fundamental Nursing Practice I*: Analysis of Practice Reports

Noriko KATO, Tomomi SATO, Kiyomi TAKAHASHI, Yuriko NAGASHIMA and Eiko NAKANO

Abstract

This study examines the contents of the reports submitted by 74 students after the *Fundamental Nursing Practice I*, which comprises of two parts-welfare-institution-for-elderly training and hospital training-and explores the practicum organization and instructional methods for future purposes. The contents of the reports included the following. The contents of the reports from the welfare-institution-for-elderly training were classified into 11 categories such as nursing and caring offered at the institutions, the equipment and functions of the institutions, elderly people's living environments, and involvement with nursing training. The contents of the reports from the hospital training were classified into 11 categories such as relationship between nurses and patients, the equipments and functions of the hospitals, patients' living environment, and involvement with nursing training. These contents are in agreement with the training targets, and therefore, it can be said that the students were able to learn what was designed to learn. In addition, the students' willingness to learn nursing was stimulated by *Fundamental Nursing Practice I*. However, the students' grasp of the reasons behind each nursing action was limited. Further investigations are necessary to evaluate the methods of teaching clinical practicum and establish an effective educational system to link the students' experience in clinical practice to lectures and lab experiences.

Key Words: clinical nursing practice, nursing education, practice report

要 旨

本研究は、本学で実施された基礎看護実習 I の実習での学生の学習内容を明らかにし、今後の教育体制の検討を行うことを目的に取り組んだ。基礎看護実習 I の実習後に提出された 74 名のレポートを対象に学習内容を分析し、今後の実習体制や教育方法を検討した。その結果、老人保健施設実習では、「施設で提供されている看護と介護」「施設の設備・機能」「高齢者の生活環境」「看護を学ぶ意欲」ほか 7 カテゴリーに、病院実習では、「看護者の患者への関わり」「病院の設備・機能」「患者の生活環境」「看護を学ぶ意欲」ほか 7 カテゴリーの学習内容に分類された。これは、実習目標とほぼ一致した内容であり、学生は実習目標に沿った学習を行えているということがわかった。また、実習での体験を通して学生の看護を学ぶ意欲へつなげていた。しかし、学生は看護者の行動を看護上の意味へと結びつけることが困難であるという傾向もみられた。今後は、実習内容や指導方法を再検討し、実習での体験を

*福岡県立大学看護学部基礎看護学講座
Department of Fundamental Nursing, Faculty of Nursing,
Fukuoka Prefectural University
連絡先：〒 825-8585 福岡県田川市伊田 4395
福岡県立大学看護学部基礎看護学講座 加藤法子
E-mail : kato@fukuoka-pu.ac.jp

講義や演習で振り返ることができるような教育体制を整える必要がある。

キーワード：基礎看護実習，看護教育，実習レポート

緒言

本大学看護学部では、「経験から学ぶ能力の育成」の教育課程の特色のもと、1年次の5月末という早い時期に基礎看護実習Ⅰを実施した。基礎看護実習Ⅰでは、様々な保健医療の場における看護活動の実際や、看護職の役割と多職種との連携の必要性を理解し、看護者としての自覚と主体的な学習の動機づけをすることを目標に、老人保健施設と病院の2施設を見学した。さらに見学した内容を深めるために、学内に戻り体験したことを振り返り意味づけるといった教育体制をとった。これは本大学の教育体制の特色であり、実習での取り組みの検討は、より効果的な教育体制を整えるために必要であると考えられる。矢口、大下、大森(1998)は、「レポートには学習者が一番印象深く受け取ったもの、問題意識を強く持ったものが表われる」と述べており、また先行研究においても、実習レポートの分析が多く行われている。そこで本研究では、基礎看護実習Ⅰの実習後に提出されたレポートから、学生の学習内容を明らかにし、そこから実習体制や教育方法など、今後の課題を検討することを目的に取り組んだ。

方法

1. 研究対象

基礎看護実習Ⅰを行った本大学看護学部1年生81名の学生のうち、同意を得られた74名の学生の提出した実習レポートを対象とした。尚、レポートは老人保健施設と病院の施設ごとに、実習で学んだこと、楽しかったこと、などについてレポートされている。

2. 基礎看護実習Ⅰの概要

1) 基礎看護実習Ⅰの実習目的・目標

基礎看護実習Ⅰの実習目的・目標および実習方法は表1に示す。

2) 指導体制

5～6名の学生を1グループとし(20グループ)、グループごとに1名の教員(主に助手)が担当する。さらに、施設ごとにスーパーバイザーとして講師以上の教員を配置し、学生や担当教員の指導・助言にあたった。

3) 対象者の学習状況

学生は一般教育科目に加え、専門基礎科目として、「看護への招待」専門科目として「基礎看護論Ⅰ」「生体機能看護学Ⅰ」「ケアリング論」の講義を受講中であり、基礎看護論Ⅰでは看護の目的論の学習中であった。

3. 研究方法

レポートの文章を、言葉や文脈を損なわずに抽出し、共通した特徴を持つ内容に分類し、その内容を整理しカテゴリー化した。カテゴリー化された内容から、実習の教育方法も含めて学習効果を検討し今後の課題について考察した。分析過程においては、一定期間をおき、3回分析を繰り返し、研究手法に精通したスーパーバイザーからの助言を受けた。

4. 倫理的配慮

倫理的配慮として、研究の目的、方法、本研究の参加の有無が成績や今後の学習過程において影響がないことを記した文書と同意書を配布し、研究代表者が口頭で説明した。研究内容に同意し、且つ同意書を提出した学生のみを調査対象とした。なお、研究によって得られた内容は匿名性を保ち、結果から個人が特定されないようにプライバシーの保護に努めた。

結果

レポートを分析した結果、両施設とも、実習を通して学んだことと、実習を通して感じたことに分類された。老人保健施設実習の学習内容を表2-1, 2に、病院実習での学習内容を表3-1, 2に示す。

1. 老人保健施設実習の学習内容

老人保健施設実習のレポートでは、1163の文脈が抽出され、実習を通して学んだことでは5つのカテゴリーに、実習を通して感じたことでは6つのカテゴリーに分類できた。実習を通しての学びでは、1) 老人保健施設で提供されている看護と介護、2) 老人保健施設の設備・機能、3) 老人保健施設を利用している高齢者の生活環境が多く、その他、入所者の特性、老人保健施設で働く医療専門職者、のカテゴリーに分類された。実習を通して感じたことでは、4) 看護を学ぶ意欲の記述が多く、その他、実習の戸惑い、実習の楽しさ、看護職の業務、看護職の魅力、実習体制に

表 1
実習目的・目標と実習方法

実習目的・目標

実習目的

1. 発達段階の異なる人と直接触れ合う体験をとおし、一人ひとりを尊重する思いと、関わる意思を育むとともに、人体の機能や構造の相違に気づき、人間の体のすばらしさを体験する。
2. 自分自身の日常生活を点検し、成長・発達の歴史や未来とのつながりを考える。
3. 様々な保健医療の場における看護活動の実際を知り、看護職の役割と他職種との連携の必要性について理解し、看護者としての自覚と主体的な学習の動機づけとする。

実習目標

1. 老人保健施設での実習目標

施設で生活する高齢者と触れ合う実習を通して、ケアを必要としている人々がどのような場で、どのような援助を受けているかを理解する。

2. 医療施設での実習目標

地域の医療施設を受診する人々はどのような健康問題を抱えて受診するのかを知るとともに、医療機関は受診者のニーズに応えるためにどのようなシステムで医療を提供しているか、看護はどのような役割を担っているのかを理解する。また、入院している人々はどのような場で、どのような看護を受けているかを知る。

実習方法

実習期間：5月26日（月）～30日（金）

- | | |
|------|---|
| 第1日目 | 午前：全体オリエンテーションおよびグループ別オリエンテーション
午後：自己学習（学内） |
| 第2日目 | 午前：実習（41名：4つの老人保健施設，40名：2つの医療施設）
午後：自己学習（学内） |
| 第3日目 | 午前：前日の実習のまとめ，明日のグループ別オリエンテーション
午後：自己学習（学内） |
| 第4日目 | 午前：実習（40名：4つの老人保健施設，41名：2つの医療施設）
午後：自己学習（学内） |
| 第5日目 | 午前：前日の実習のまとめ，全体カンファレンスの準備
午後：全体カンファレンス |

実習グループおよび指導体制

学生は5人1組の15グループおよび6名1組の1グループ、計16グループに編成。

各グループを1名の担当教員（主に助手）がオリエンテーション、実習、まとめに関して担当し、各施設に講師以上の教員が1名スーパーバイザーとして、担当教員および学生に関する指導助言を担当する。

対する満足感のカテゴリーに分類された。以下に、学生の老人保健施設実習での特徴的な学びとして表わされた1)～4)の内容について述べる（表2-1, 2）。

1) 老人保健施設で提供されている看護と介護

老人保健施設で提供されている看護と介護については312文脈が抽出された。この中で対象者との接し方に関しては72文脈であり、コミュニケーションのとり方や笑顔で接する事の必要性など、職員と対象者の接する場面を見たことに付随した記述が多かった。また、看護と介護については入浴介助や食事介助など、実際に職員が対象者と接する場面を見て記述している事が多かった。特に食事介助では、食事の形状や食事時間の工夫などの具体的な記述が見られた。「看護職の役割の一つとして健康管理がある」という記述は多く見られたが、実際の生活援助場面を見て、それを看護に結び付けているものは少なく、「看護を提供している場面

を見られなくて残念だった」などの記述もあった。

また、「対象の自立のためのチームでケアプランを作成している」、「寝たきりにならないように体操への参加を促している」、「日替わりでレクリエーションを計画している」などのケアの工夫に関する記述もあった（表2-1）。

2) 老人保健施設の設備・機能

老人保健施設の設備・機能に関しては266の文脈が抽出された。老人保健施設の機能については、在宅復帰を目標にした施設であること、実習施設で行われているリハビリテーションや通所リハビリや短期入所のサービスについて等、職員や教員の説明や自己学習により理解を深めていた。設備については、安全性を重視した廊下・トイレ・浴室のバリアフリー構造や、プライバシーを尊重するための、カーテンの工夫など見学を通しての内容の記述が多くみられた（表2-1）。

3) 入所者の生活環境

入所者の生活環境については、116の文脈が抽出され、中でも、室温や採光、換気、音などの物理的環境に注目している内容が最多で31文脈であった。また、施設見学を通して受けた印象もふまえ、「暖かい雰囲気」を大事にしている、「開放的である」、「生活感にあふれている」、「家庭的な造りになっている」など、主観的な内容が多く記述されていた。痴呆病棟の見学では、「安全性を重視した造りになっているため、殺風景でさみしい」、「閉じ込められているような感じをうける」、などの否定的な内容の記述がみられた。また、入所者に規制を感じさせないで安全を守る工夫として、センサーマットにより危険行動を早期に察知していることや、痴呆患者にボタンのない服を着用させていること、灰皿に鍵をかけているなどの工夫に注目していた(表2-1)。

4) 看護を学ぶ意欲

看護を学ぶ意欲に関しては89の文脈が抽出された。高齢者とのふれあうという体験を通して、コミュニケーションの方法について学びたいなどの具体的な看護技術の習得への意欲がみられた。また、看護を行うためには専門的知識・観察能力が必要であることを理解し、具体的に学びたい内容として音楽療法、バリアフリー、痴呆症について挙げていた。その他、「自分の考える看護とは何かを探求する気持ちが強まった」、「相手の思い・今何をすべきかを常に考えていきたい」、「より良い方法はないかを常に見極める能力を培いたい」など、今後看護を学習していく中で、学生自身の目標や課題を見つけているものもあった(表2-2)。

2. 病院実習の学習内容

病院実習のレポートから、1017の文脈が抽出され、実習を通して学んだことでは6つのカテゴリーに、実習を通して感じたことでは5つのカテゴリーに分類できた。そのうち学習内容については、1) 看護者の患者へのかかわり、2) 病院の設備・機能、3) 患者の生活環境が多く、この他、医療施設で働く医療専門職者、受診システム、入院患者の特性に分類された。実習を通して感じたことでは、4) 看護を学ぶ意欲が多く、このほか、実習の戸惑い、看護職の業務、看護者の魅力、実習の楽しさに分類された。以下に、学生の病院実習での特徴的な学びとして表われた1)～4)の内容について述べる(表3-1, 2)。

1) 看護者と患者のかかわり

看護者と患者のかかわりでは439の文脈が抽出された。学生は、患者と看護者の関わり場面を見学し、その姿から様々な気づきや理解を深めていた。学んだ内容として、看護師がさりげなく図っているスキンシップやコミュニケーションの方法について多く記述していた。また、患者をお客様として迎えるサービス業としての看護のあり方や、チームで動く労働形態を捉えている記述もあった。看護者が患者に納得のいくような説明をしている場面や、患者と話しながら患者の変化に注意を払っている場面など捉え、看護という仕事が責任ある仕事であることを理解し、「見学時の看護師のようになりたい」という理想像を記述する学生もいた(表3-1)。

2) 病院の設備・機能

病院の設備と機能については、161の文脈が抽出された。とくに24時間体制で医療情報管理が行われていること、20年以上カルテを保管していること、停電時の対応のために自家発電を管理する部署があることなど、病院のシステムに関する記述が多かった。また、病院全体の造りとして、バリアフリーを意識した床の造りやトイレなどに設置された手すり、窓を開ける範囲が上の階ほど狭くなるなど、具体的な構造に関するものもあった(表3-1)。

3) 患者の生活環境

患者の生活環境については142の文脈が抽出された。中でも、病棟の廊下・窓・トイレ・浴室などの大きさや広さ・機能性について、患者にとって使いやすいものになっていることが多く記述されている。また、ベッドの柵がはずせて洗髪できる場面を見学し、動けなくてもできるだけ普通の生活ができるように考えていると捉え、驚きを表している記述もあった。また、手洗いや滅菌物管理などの感染対策や、患者の重症度の区別や重症度により配慮されたナースコールの設置位置などにも注目していた(表3-1)。

4) 看護を学ぶ意欲

看護を学ぶ意欲に関しては、138の文脈が抽出された。「観察能力・専門的な知識や技術を身につけたい」との記述や、具体的に「コミュニケーション能力を身につけたい」などの記述も多く見られた。また患者と看護者の関わりを見て、信頼関係を築きたいと考え、そのような看護者になれるよう学習したいとの記述もあった。具体的には、「臨機応変に対応していきたい」

表 2 - 1
老人保健施設実習の学び

項目	文脈数	主な内容	() は文脈数
老人保健施設で提供されている看護と介護	312	<ul style="list-style-type: none"> 対象者との接し方に関して：笑顔が大事，コミュニケーションのとり方について等 (72) 寝たきり防止のため離床を促すように働きかけていた (13) 看護と介護のチームワークの必要性を理解した (17) 具体的なケア内容について：食事の工夫，入浴の工夫等 (54) 看護師の仕事は主に検温，包帯の付け替えなど健康管理をする事 (28) 看護と介護は，目的は違っているけど本質は同じだと思った (12) 	
老人保健施設の設備・機能	266	<ul style="list-style-type: none"> 老人保健施設は家庭復帰のための自立支援をするところ (25) 老人保健施設では，医療の提供も行われている (11) 施設では通所リハビリテーション，短期入所，ケアプランサービス等の福祉サービスがあった (17) 老人保健施設の近所には協力体制がとれる病院や施設があり，医療的なサービスと福祉的なサービスをともに提供できる (14) 浴室は，車椅子やストレッチャーで入れるような造りになっていた (16) 転倒防止のためにセンサーマットが取り入れられていた (8) 施設はバリアフリーが進んでいて，高齢者のことを考えたつくりになっている (60) 	
高齢者の生活環境	188	<ul style="list-style-type: none"> 採光が十分にあり，開放的な雰囲気だった (31) 施設内に入所者の作品があらゆるところに飾られていて，家庭的な雰囲気である (20) 部屋は 3 種類があり，入所者や家族の希望で部屋を選ぶことができるようになっていた (8) 様々な行事が多く取り入れられ，入所者が楽しく過ごせるような工夫があった (18) 在宅復帰を目指す場所なので，より自宅での生活に近い環境に設定してある (8) 安全面を優先させた痴呆病棟は，花瓶や絵がなく殺風景だった (8) 	
入所者の特性	116	<ul style="list-style-type: none"> 入所者の平均年齢は 85 歳で年々高くなっている (5) 高齢者は視力や筋力低下，精神面の衰えがあるので精神的・身体的ケアが必要である (11) 痴呆の方と接するときは，否定せずに受容すること，話を聞くこと，話をあわせることが大事 (13) 病状安定期にあり入院治療の必要はないが，家庭での介護が困難な方が入所している (9) 家庭復帰を目標としているが実際に家庭復帰された方は 1 割にも満たない (12) 入居者のほとんどが複数の病気を抱えている (21) 	
老人保健施設で働く医療専門職者	66	<ul style="list-style-type: none"> 医師，看護職員，介護職員，理学・作業療法士，介護支援相談員，管理栄養士と様々な専門職の人たちが働いている (28) よいサービスを提供するには，スタッフ間の連携が必要である (7) 入所者の意思を尊重し，よりよいケアを目指して多くの職種が個別のケアをしていた (21) 	
合計	948		

表 2 - 2
老人保健施設実習を通して感じたこと

項目	文脈数	主な内容	() は文脈数
看護を学ぶ意欲	89	<ul style="list-style-type: none"> コミュニケーションの方法について学んでいきたい (24) 専門的知識を増やしていきたい (9) 相手の立場にたった目を養っていきたい (21) 「自分の考える看護とは何か」を探求しようとする思いが強まった (17) 	
実習の戸惑い	53	<ul style="list-style-type: none"> コミュニケーションがとれないことに，もどかしさや悔しさを感じた (28) 何から何まで初めてで戸惑ってしまい，質問することすら出来ず悔しい思いをした (5) 入所者の方が在宅復帰することは大変難しいことを知り，戸惑った (3) 入所者に「家族に会いたい」と言われたときは戸惑った (4) 	
実習の楽しさ	24	<ul style="list-style-type: none"> 対象者とコミュニケーションがとれたこと (5) 対象所の方が笑顔で接してくれたこと (7) 	
看護職の厳しさ	23	<ul style="list-style-type: none"> 看護師が少なすぎて夜勤の勤務が大変そうだと思った (8) 強い精神力と忍耐力が必要だと思った (2) 	
看護者の魅力	16	<ul style="list-style-type: none"> 「ありがとう」と言ってもらえる看護の仕事に魅力を感じた (5) 看護という道を選んでよかった (2) 	
実習体制に対する満足感	10	<ul style="list-style-type: none"> 実習時間が短かったので，もう少しゆとりを持って実習したかった (5) 対象者ともっと接する時間がほしかった (3) 遠かったけど来た甲斐は十分にあった (1) 	
合計	215		

「笑顔で対応したい」「手際よく視線を合わせて話せるようになりたい」「客観的にみることができるようになりたい」などであった。実習を通して漠然とした思いとして「意欲的に看護学を学んでいきたい」「良い看護師になりたい」「患者さんの気持ちを知り、大切にしたい」といった記述も見られた(表3-2)。

3. 老人保健施設実習と病院実習の学習内容の比較

老人保健施設実習と病院実習の学習内容を比較すると、共通して注目していたのは、看護者と対象との関わり、次いで各々の施設の設備・機能と利用者の生活環境であった。対象の特性については、老人保健施設実習では注目している記述が多く見られ、病院実習では患者のニーズに応えるためにどのようなシステムで医療を提供しているかに関する記述が多かった(表2-1, 2 表3-1, 2)。

病院実習と老人保健施設実習のレポートのうち、実習を通して感じたことについては、共通したカテゴリーに分類された。その内容の主なものを比較すると以下のような結果が得られた。

1) 看護を学ぶ意欲

看護を学ぶ意欲については、両施設とも実習を通して感じたことの中では抽出数は最多であり、内容としても同様の記述が多かった。特徴としては「コミュニケーション能力や専門的な知識を学びたい」、「相手の立場に立った目を養っていきたい」などの記述が共通してみられた。

2) 実習での楽しさ、戸惑い

実習での楽しさや戸惑いについては、病院実習に比べ、老人保健施設実習のほうに多くの記述が抽出された。老人保健施設の内容としては、高齢者との触れ合いの場面を通して、楽しさや戸惑いを経験し捉えたものが多かった。それに対し、病院実習では看護師の患者へのケア場面から、楽しさや戸惑いを記述しているものが多かった。特に病院実習では、看護師が患者に声もかけず事務的に対応することや、プライバシーが守られていない状態でおむつ交換する場面など倫理的問題を捉え、戸惑いとして記述したものもあった。

3) 看護職の業務

看護職の業務については、両施設とも仕事量に関するものが多く、「大変である」や「負担が大きい」と記述している内容が多かった。

考 察

老人保健施設の実習では、職員のオリエンテーションや施設内見学から、施設の設備や機能、老人保健施設で働く看護や介護職の役割、老人保健施設で働く医療専門職者などを理解し、また実際に高齢者と触れ合うという直接的な関わりを通して、高齢者の特徴やニーズを知り、対象の特性を捉えることができていた。

病院の実習では、職員のオリエンテーションや病院内見学から、医療機関の機能や役割、医療機関での看護師の役割、病院で働く医療専門職者、受診システムなどを理解していた。また、看護者と対象者との関わり場面を間接的に見るという体験を通して看護師の役割を学んでいた。

学生のレポートを分析した結果得られたカテゴリーの項目と、実習目標(表1)を具体的に示した実習内容とがほぼ一致していたということから、学生は、実習目標にそった学習ができていたということがわかった。

また、老人保健施設では老人と触れ合うという直接的な関わりを通して、病院では看護者と対象者のかかわりを間接的に見るという体験を通して、看護職の魅力を感じ、将来の看護師像を描き、今後の看護を学ぶ学習意欲へとつなげていた。先行研究でも、実習が学生の看護への動機づけへとつながったという報告は多く(出口, 宮川, 梶山, 1996; 野崎, 1999; 大浦ほか, 1999; 桜井, 山口, 1999; 塩川ほか, 2002), 本大学の学生も同様に、基礎看護実習 I での実習を通して、看護の魅力や学習動機につなげていたと考える。

今回の実習では、施設での実習を各施設半日とし、実習での学びを振り返るための時間を多くとり、学生への細やかな気配りができるように少人数への指導体制を整えるなど、1年次の5月末という時期も考慮した実習教育体制をとった。前述したように、学生は実習を通して、多くのことを学び、看護を学ぶ意欲へとつなげている事からも、この時期に実習を行う学生にとって、ゆとりをもった実習体制や手厚い指導体制を整える事の意味は大きいといえる。

しかし、分析をしていく中で、いくつかの課題も見出された。2 施設の学習内容の比較から、老人保健施設実習に比べ病院実習では、対象の特性についての記述が非常に少ないという結果であった。これは、病院実習では対象との直接的関わりがほとんど無かったために対象の特性やニーズを認識する機会が少なく、また、

表 3-1
病院実習の学び

項目	文脈数	主な内容	() は文脈数
看護者の患者へのかかわり	439	<ul style="list-style-type: none"> ・患者の細かな気配りができている (38) ・コミュニケーションやスキンシップがさりげなくでき、声かけが多い (30) ・患者の立場に立って物事を考えている (13) ・十分なインフォームドコンセントができ信頼関係も築けている (9) ・チームナーシングで行っている・連携が十分取れている (9) ・話しながら変化に気づく観察力がある (9) ・患者一人一人に計画を立てている (12) ・玄関から患者をお客様として迎えている (22) ・てきぱきと効率よく動いている (21) ・食事やりハビリなど、高齢者に対する工夫がある (7) ・医療ミス防止の為に工夫としている (13) 	
病院の設備・機能	161	<ul style="list-style-type: none"> ・色々な器具や畳などもあり、機能訓練できる場所や設備が整っていた (12) ・停電時の対応として自家発電がある (9) ・コンピューター管理により、待ち時間の短縮など能率の良い医療を提供している (34) ・安全対策に配慮している (6) ・バリアフリーがなされて、患者に優しい (11) ・カルテ庫でカルテを法定年限以上、長期にわたり保存している (18) ・医療情報管理は 24 時間行われている (18) ・中待合室はプライバシー保護に配慮した空間である (4) 	
患者の生活環境	142	<ul style="list-style-type: none"> ・広くゆったりとしたスペースがある中で入院している (16) ・病室は、窓が大きく、明るい色調でまとめられており、開放的な空間である (13) ・バリアフリーで生活しやすい (19) ・花や絵がある場所で、癒しの効果を発揮していた (5) ・トイレや浴室などに、手すりがある、また必要な患者には、トイレが入院部屋にある (13) ・重症患者はステーションが近く、緊急に対応できるような工夫がされている (6) ・白衣の着用や手洗いなど、感染対策が徹底されている (7) ・プライバシーが守られている環境がある (7) ・ベット柵の取り外しができ、洗髪がベッド上でも可能なつくりになっている (5) 	
医療施設で働く医療専門職者	53	<ul style="list-style-type: none"> ・多職種が働いている (栄養士・調理師・作業療法士・理学療法士・放射線技師・医師・看護師・言語聴覚士) (41) ・様々の職種の人達が連携をとっている (2) ・すべての職業が重要な役割を果たしており、すべて結びついて病院が成り立っている (6) 	
受診システム	21	<ul style="list-style-type: none"> ・高度な情報処理システムや精密機械により、受診システム自体が機械化されている (10) ・外来受付から機械で各科へ情報が流システムとなっている (2) ・医師がオーダーした処方箋が薬局部へ行き、薬剤師により薬がつけられる (4) 	
入院患者の特性	6	<ul style="list-style-type: none"> ・入院患者では、70 歳以上の患者が 3 割いる (2) ・残された機能を充分活かすことができるようにという目標をもっていた (3) ・食べる習慣を持つことは大切で治療に効果的である (1) 	
合計	822		

未だ看護学の対象論や健康障害に対する学習が未修得であったため、認識に至らなかった事も影響していると考えられる。今後は、病院実習でも対象の健康問題やニーズを意識できるような実習内容を検討し、学生のレディネスを考慮した関わりをしていくことが必要であると考えられる。

次に、今回の実習ではカンファレンスを数回もち、教員は学生が体験したことを意味づけるような関わりを行ったが、学生はレポートでは表面的な状況場面を捉えるというレベルにとどまり、看護者の行動が看護上どのような意味があるのかといった、看護上の意味

づけをすることが困難であった。今後はカンファレンスでの学びを反映できるような、具体的な課題の出し方や、自己の学びをより具体化し、他人の体験と共有化できるようなカンファレンスの持ち方を工夫していく必要がある。さらに、実習での体験を学内の講義や演習で振り返ることができるような体制を整えていくことが必要である。

研究の限界として、学生が自由記載したレポートの記述を分析の対象としたため、抽出された内容が学生の学習内容すべてをあらわすものではないこと、レポートが実習の評価の対象であるため記述内容に偏り

表3-2
病院実習を通して感じたこと

項目	文脈数	主な内容	()は文脈数
看護を学ぶ意欲	138	<ul style="list-style-type: none"> ・周りを見つめ、一人一人に配慮できるような看護師になりたい (20) ・知識・技術を身につけたい (29) ・コミュニケーション能力を磨きたい (24) ・患者の気持ちを理解でき、思いやりがもてるようになりたい (25) 	
実習の戸惑い	24	<ul style="list-style-type: none"> ・プライバシーが守られていない場面があったとき (3) ・声かけなしの看護師の対応を見たとき (5) ・忙しきで事務的な仕事をしている看護師の姿を見たとき (2) ・学生らの知識・技術の未熟さに気づいたとき (7) 	
看護職の仕事 (業務)	19	<ul style="list-style-type: none"> ・忙しい (7) ・立ち仕事で、精神的にも肉体的にも負担が大きい (8) ・人数が少ない状態で勤務している (2) 	
看護職の魅力	10	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事がスピーディで元気が溢れている (4) ・和やかな雰囲気作りや安心させられるケアができていく (3) 	
実習の楽しさ	4	<ul style="list-style-type: none"> ・患者と看護者のやり取りを聞いたこと (1) ・患者との関わりがもてたこと (2) 	
合計	195		

があること、などの可能性があげられる。今後もより効果的な教育体制を整えるために、実習での取り組みを検討していく必要がある。

結 語

本研究は、基礎看護実習Ⅰの実習後に提出されたレポートから、学習内容を明らかにし、今後の教育体制の検討を行うことを目的として取り組んだ。その結果、学生は基礎看護実習Ⅰの実習目標にそった学習ができ、実習での体験を通して看護を学ぶ意欲へとつなげていた。しかし、看護者の行動を看護上の意味へと結びつけることが困難であるという結果も見出された。今後は、実習内容や指導方法を再検討し、実習での体験を講義や演習で振り返ることができるような教育体制を整える必要がある。

謝 辞

基礎看護実習Ⅰの実施にあたり、快く実習を引き受け、丁寧にご指導くださいました実習施設の方々および利用者の方々、直接実習指導を担当していただいた看護学部の先生方に感謝します。また、この研究に当たり、研究承諾をしてくれた学生の皆さんにもこの場を借りて深謝いたします。

文 献

- 出口禎子, 宮川昌子, 梶山祥子. (1996). 基礎看護学における見学実習の意義: 学習の動機を高める臨床からの学び. *東邦大学医療短期大学紀要*, 10, 51-61.
- 野崎真奈美. (1999). 初めての臨床実習において看護学生が看護の動機づけを高めた状況の分析. *日本看護学会論文集 30 回看護教育号*, 44-46.
- 大浦まり子, 野口純子, 陶江七海子, 滝川由美子, 堀美紀子, 吉本知恵, 伊達裕子, 床田弘子. (1999). 基礎看護学実習Ⅰ: レポートの内容分析. *香川県立医療短期大学紀要*, 1, 61-69.
- 桜井礼子, 山口真由美. (1999). 看護教育における初期体験実習の経験と意義. *大分看護科学研究*, 1(1), 20-26.
- 塩川華子, 中島五十鈴, 青井聡美, 土谷美恵, 杉本吉恵, 松永保子, 田村典子. (2002). 臨地実習の学びをより促進させる教員の関わり方: 基礎看護実習Ⅰ終了後のアンケート調査から. *広島県立保健福祉大学誌*, 2(1), 53-63.
- 矢口みどり, 大下静香, 大森武子. (1998). 学生のレポートから行動姿勢を読み取る. *看護教育*, 39, 435-440.

受付 2003.8.29

採用 2003.11.12